
『放課後の欲情』

埴輪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『放課後の欲情』

【コード】

N0094W

【作者名】

埴輪

【あらすじ】

ちよつとした切ない恋シリーズの番外編。

作者から見て切なくないので番外編。

激甘注意。

キスをするときの礼儀として目は閉じるべきだ。

そう思いながらも、震える彼女の睫毛が見たくて僕は目を閉じることができない。

校庭から運動部の威勢の良いかけ声がする。

吹奏楽部の奏でる緩やかで派手やかな音色や、時折聞こえる先生の怒鳴り声、廊下を歩く生徒の足音、それらの音全てが遠い。

窓から差し込む夕日、二人だけの教室。

なんてベタなシチュエーションだろうか。

鼓膜にダイレクトに響くのは、濡れたリップ音と不恰好な息遣いだ。どうしようもなく、甘い。

彼女は肩を強張らせ、目元を僅かに赤くした。

僕を見ないように必死に視線を彷徨わせる。

初心な女の子ってどうしてこんなに可愛いんだろう……

いや、彼女だからこんなに可愛いのか……うん、きっとそうだ。

一人で納得しながら、僕は彼女の湿った唇を見つめた。

リップクリームをあまり好まない彼女の唇は乾燥し、カサカサだった。

それでも少し唾液で湿らせただけで、今は赤く色づいている。

なんておいしそうな唇だろう。

母のようだ、と言ったらくさすぎるかもしれない。

誰にも見せたくない。

愛しさと切なさ、独占欲で、僕はくしゃくしゃの心のまま彼女に
もう一度キスをした。

やっぱり目は閉じずに。

彼女の震える睫毛を見つめたまま、僕は彼女を引き寄せる。

睫毛がふるふる震えて、きらりと光った。

窓から差し込む夕日に照らされ、それはダイヤモンドのようだった。

ああ、なんてベタでくさくて、陳腐な放課後だろう。

「タカヤ君……！」

咎めるように彼女が胸を叩く。

いつ見回りが来るかと彼女は脅えているのだろう。

睨んでくる姿も可愛い……

ああ、ヤバイ。

重症だ。末期だ。

もう、死んだ。

「好きだよ、ユキ」

君のせいで胸が破裂しそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0094w/>

『放課後の欲情』

2011年10月7日03時23分発行